

中南米で見つけた日本人移住の歴史

真 冬の日本を飛び立ち、地球の反対側、真夏のパラグアイに到着したのは1月下旬。中南米といえば、日本から地理的に最も遠い地域の一つ。実は、約163万人（推定）もの日系人が暮らすという、私たち日本人にとって、身近な場所でもある。

「すごい！」
この一言しか出てこなかった。
「遠いと思っていたパラグアイに、日本人が築き上げてきた世界があるなんて」

目の前に広がる街並みを眺めながら、そう驚いた表情で話すのは「なんとかなきゃ！プロジェクト」※1著名人メンバーの川嶋あいさん。日本国内で1000回を超える路上ライブを行い、若者から圧倒的な支持を得るシンガーソングライターだ。

川嶋さんはアーティストとしての活動と並行して、国際協力NGO「アイラブワゴン」を立ち上げ、開発途上国の学校建設支援を行うという一面を持つ。きっかけは、中学生の時に見たアフリカのドキュメンタリー番組。やせ細った子どもたちを見て「私に何かできることがあるば」と思ったのが原点だ。

最初に川嶋さんが向かった先は、首都アスンシオンから車で約5時間、1961年に日本人の入植が始まったピラボ市。街中にある移住資料館には、約半世紀前、原生林が覆い茂る土地を開拓して

格差是正のために奮闘する青年海外協力隊

いる日本人の写りが飾られていた。第二次世界大戦後、この地に渡ってきた日本人たちが苦労を重ね、荒れた土地を開拓して、一つの街を生み出してきた歴史を熱く語るのには、ピラボ日本人会事務局長の日系1世の佐藤満さん。その話に、川嶋さんは真剣に耳を傾けていた。

しかし日系社会の発展の裏側で、現地の人々からこんな声が聞こえてくるようになったという。「どうして日系人ばかりが大農場を持っているのか」。同じ地域の中でも、ピラボ市周辺にはまだまだ貧しい人々が多く存在する。そこでJICAは「ピラボ市総合コミュニティ開発



福井さん(左)にイグアスの広大な大豆畑を案内してもらった川嶋さん

特別レポート

文・写真=鈴木由佳里(JICA広報室)

**川嶋あいさん
地球の反対側で見た
日本の軌跡**

in パラグアイ & ブラジル

シンガーソングライターとして活動する傍ら、NGOを立ち上げて開発途上国の学校建設に取り組む川嶋あいさん。地球の反対側にある日本人の移住の歴史を見てみたい。今年1月、日本と中南米とのつながりを確かめるべく、パラグアイとブラジルに飛んだ。



パラグアイのサントドミンゴ村で、農村部の子どもを支援するミタイ・ミタクニャイ基金の活動を視察。サッカーボールをプレゼントした



手工芸の技術指導をする大澤さん(右)。サンダルにビーズをつけて販売する



ポランティアチーム派遣プロジェクト」を実施。野菜栽培、公衆衛生、家政などさまざまな分野の青年海外協力隊員が日系社会と協力しながら、パラグアイの貧困地域の生活改善・所得向上を支援している。

その中の一人、ピラボ市内の貧困地域で活動する大澤理絵隊員の活動を視察した川嶋さん。この日は、現地の女性たちがサンダルにビーズの飾りをつける作業をしていた。「自分たちの手で続けることができるよう、楽しく、手軽に作れるよう工夫しています」と大澤さんは話す。完成した製品はピラボ市内のスーパーなどで売られ、女性たちの貴重な収入源となっている。地域に溶け込み、日系人とパラグアイ人の懸け橋となっている隊員たちと出会い、川嶋さんは「自分と同世代の隊員たちに勇気をもたらした」と感銘を受けていた。

あるイグアス移住地へ。国内最大規模の日系人口8500人を擁するこの移住地では、日系移住者が不耕起栽培という大豆の栽培方法を採用し、パラグアイ全土への普及に成功している。ここで出会ったのが、イグアス日本人会の福井一朗会長。岩手県出身の福井さんは東日本大震災発生後、遠く離れた祖国の危機をテレビで目の当たりにして、「何かせずにはいられなかった」という。「被災地支援」豆腐100万丁プロジェクト※2

**大都会サンパウロで
日本文化を学ぶ**

が始めた経緯を聞き、川嶋さんは彼らが日本に寄せる思いをかみしめていた。

続いて向かったのが、日本の20倍以上の面積を有するブラジル。色とりどりの花や緑に囲まれたパラグアイから一転、近代的な高層ビルが目前に現れた。1908年に791人の日本人移民が降り立ったサンパウロ。現在、その数は約150万人までに拡大している。

川嶋さんは、サンパウロにあるブラジリア学園を訪問。幼稚園から高校までの子どもたちが学ぶこの学校では、日系社会青年海外ボランティアの浅岡径子隊員が日本語や日本文化を教えている。「ブラジルの子どもたちは、みんな自分の長所を知っています。幸せに生きていく力

を持つているように感じます」という浅岡さんの言葉にうなずく川嶋さん。浅岡さんの授業で子どもたちと一緒に折り紙を切りばりして、愛の文字を作るなど交流を深めていた。

パラグアイとブラジルで、たかさんの出会いと経験を得た川嶋さん。「日本人の底力とエネルギーを感じました。私も自分ができることを着実に続けていきたい」と語ってくれた。地球の反対側のもう一つの「日本」から運ばれた優しい思いを胸に、これからは温かい音楽を奏でてくれるに違いない。



ブラジリア学園では、日本語はもちろん、折り紙や童謡、あやとりなどの日本文化も教えている



イグアス日本語学校の子どもたちと[上写真]。川嶋さんは「50年前にこの地に来て、命をかけて原生林と闘ってきた人たちのことを語り継いでほしい」という思いで歌をプレゼント[下写真]

※1 途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。
※2 「パラグアイ日本人会連合会」ががかりを取り、被災地支援の一環としてイグアス移住地産の非遺伝子組み換え大豆100トンをイグアス農業組合の協力を得て提供。日系農家と大豆の取引を行っている株式会社ギアリンクス(岐阜県)を通じて豆腐に加工され、被災地で配布された。